読書推進運動

No.675

★「伊藤忠記念財団 子ども文庫助成事業」
助成贈呈先 決定（2・3頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

装幀の魅力・本のすがた

本は日本文化をかたどった「もの」であり、そこには言霊が宿っている。

装幀家・アートディレクター　芦澤泰偉（あしざわたいい）

第56回 造本装幀コンクールで『マークの本』（佐藤卓著、紀伊國屋書店）が「読書推進運動協議会賞」をいただいた。グラフィックデザイナーの第一人者である佐藤卓さんが制作した企業のマークを集めた本で、マークとその制作のポイントが見開きで載っている。マーク制作の教科書ともいえる本である。四六判並製で刷り色が2色、紙もとりわけ凝ったものではない。カバーのビジュアルに迷ったが、集められたマークのなかに一点だけ特定の企業のマークでなく、佐藤さんがディレクションした環境問題をテーマにした企画展「water」のマークを見つけた。これでビジュアルは決まり、シンプルで、お金をかけない装幀の本ができ、賞を取れたので、ことさらうれしかった。

いろいろなジャンルの装幀をこなしているが、最近、小説では圧倒的に歴史・時代小説のが多いのは、高橋克彦さんを筆頭に、山本兼一さん、安部龍太郎さん、諸田玲子さんの小説を多く手がけてきたことが要因だと思っている。また最近は若い装幀家の歴史・時代小説の装幀が、主人公をアニメ風にデザインしたものが多いことへの反動かもしれない。依頼を受けるたびに、いままで作ったことがない斬新な装幀に挑戦しようと心掛けているが、100%満足する装幀にはなかなかいきつかない。

歴史・時代小説の装画は、ありもの（過去の画家の作品）を使うことはめったになく、現在活躍中の日本画家やイラストレーターに依頼することが多いが、どんな絵を描いてもらいたいかこちらのイメージを必ず伝えることにしている。まずはゲラを読んだ段階で、自らラフ画を描いてみる。それから編集者を交えて彼らと打ちあわせをする。これまで何度も一緒に仕事をしてきた間柄なので装画家の実力も十分把握しているし、こちらのイメージを上回る力を発揮してくれる。特に小説の装幀はひとりでできる作業ではなく、編集者、装幀家、装画家による三位一体の仕事である。

装幀の歴史は長く、その初期には作家が選んだ画家が装幀者であった。橋口五葉、小村雪岱などの画家による素晴らしい装幀が誕生したのは明治半ばを過ぎてからで、その後も装幀は画家の仕事であった。高度成長期を迎え、デザイナーが装幀をするようになり、杉浦康平さんをはじめ先駆者が何人も誕生した。文学作品のデザイナーによる装幀は、菊地信義さんによって本格的に始まったといえる。

装幀はアート作品ではないので、内容を無視することはできない。本の内容とデザインをちょうど綱渡りの長い棒でバランスをとりながらする仕事である。またそのデザインは、現在の時代感覚をも反映したものでなければならない。古典の本でも復刊すれば今の時代の顔つきになり、文学や哲学などの人文書も、この今という時代感覚を表現できていなければ、魅力ある本として読者の目には映らない。その顔つきを作るのに、書体や紙の選択をはじめとして、印刷技術のあれこれに通じていなければならない。そうした意味で本は日本文化をかたどった「もの」であり、そこには言霊が宿っている。

〈2023年度〉伊藤忠記念財団 子ども文庫助成事業 助成贈呈先決定

公益社団法人 読書推進運動協議会が公益財団法人 伊藤忠記念財団から事業の一部の委託を受けている「子ども文庫助成事業」の2023年度助成贈呈先が決定しました（計110件）。

本年度の応募件数は、子どもの本購入費助成103件（病院・施設子ども読書活動費助成含む）、子どもの本100冊助成54件、子ども文庫功労賞5件の計162件。

この助成事業は、伊藤忠記念財団が子どもの読書についての啓発、指導に関する民間の有益な活動の目的達成のために行っており、今年度で第49回、助成件数は2808件となりました。

伊藤忠記念財団では2024年度も同助成を実施します。応募期間は、4月～6月の予定です。応募要項は3月、伊藤忠記念財団および読書推進運動協議会ホームページに掲載予定です。

なお、各道府県読書推進運動協議会、および各都道府県立中央図書館へは、当協議会の依頼状を同封したうえで伊藤忠記念財団よりお送りいたします。

◆子どもの本購入費助成先一覧（60件）

児童書・絵本などの図書購入費用、紙芝居・人形劇など読書啓発活動につながる実演作品の購入費用として一律30万円を助成。半額の15万円までを読書啓発に関連する講演会・研修会の開催費や参加費、備品の購入（書籍管理備品、実演用備品など）に使用できます。また、同財団が指定する団体からの講師派遣、研修参加に助成金の全額を使用できるプログラムもあります。

子どもたちの読書啓発を行っている民間の文庫や実演団体、連絡会などが対象（営利法人、大規模法人、公共機関などは対象外）。実質的に草の根運動と見なされる個人・団体であること、3年以上の活動歴があり、今後も継続した活動が見込まれることが必要です。

北海道　絵本館ブックスタート ボランティア
北海道　E本よもう！ どらねこ倶楽部
岩手県　おはなしちゅーみん
宮城県　市民公益活動団体　石巻キャリア教育推進ネット
福島県　ばんげ読み聞かせの会
茨城県　つくしんぼの会
茨城県　読み聞かせ「虹の会」
茨城県　瓜連おはなしの会 ルピナス
千葉県　おはなし♪すきっぷ♪
千葉県　えほんとおはなしの会 〝くるんぱ〟
東京都　おはなしカラフル
東京都　グルーンヒル寺田こども文庫
東京都　くめがわ電車図書館
東京都　柿の木文庫
神奈川県　大井小学校 図書ボランティア
神奈川県　楽しい絵本を広める会「子どもの本箱」
神奈川県　Book&Art ニワシドリ・まちライブラリー@ざま☆ほしのたに文庫
富山県　富山県図書館を考える会
山梨県　高源寺文庫
長野県　読み聞かせボランティアの会
岐阜県　読み聞かせサークル ぽけっと
静岡県　特定非営利活動法人 楽舎
愛知県　sono＊mono 文庫
愛知県　kodomiru 文庫
三重県　わくわくフレンズ
滋賀県　花咲きまま
大阪府　おはなしボランティア アナンシ
大阪府　まちライブラリー北勝堂
兵庫県　遊文庫
兵庫県　ももっこおはなし隊
奈良県　NPO法人　わくわくスタディひろば
奈良県　橿原おはなしの会
奈良県　ころころたまご
和歌山県　かんりん文庫
鳥取県　おはなしろうそくの会
岡山県　倉敷市子ども文庫交流会
広島県　ちいさなおはなしの部屋 森とユニコーン
広島県　ほっとスペース・トントン
香川県　図書館ボランティア「おおばこ」
愛媛県　おはなし屋えっちゃんのおはなしCAFE
高知県　山の手子ども Book 隊

高源寺文庫（山梨県）

福岡県　篠栗おはなし会
福岡県　くすの木語りの会
福岡県　くるめおはなしりんごの木
福岡県　たぐま文庫
福岡県　おはなし会　昔っコ
福岡県　月あかりの会
佐賀県　図書室ボランティア「みっけ」
佐賀県　上峰小学校おはなし会
長崎県　ボランティアサークル 読み聞かせの会　紙風船
鹿児島県　こひつじ文庫
鹿児島県　南種子町おはなし子ども会
アメリカ　アイオワ日米協会
イギリス　どんぐり文庫
イギリス　きりんさん文庫
イギリス　ICBA UK てまり文庫
イギリス　エヌハチ文庫
イギリス　かもめ文庫（Brighton & Hove Japanese Club）
オーストラリア　メルボルン青空文庫
フランス　Les Petits Azukis ぷちあずき

◆病院・施設子ども読書活動費助成先一覧（17件）

図書購入費用および読書啓発活動につながる実演作品の購入費用として一律30万円を助成。障がい

を持つ子どもたちに対する読書支援機器などの購入、および、布の絵本や点字絵本などバリアフリー図書作成のための費用も含まれます。こちらも、助成額の半額15万円までを、講習会の開催費や参加費および備品の購入に使用することができます。

病院、障がい児施設、養護施設などの子どもたちに対して、読書啓発活動を行っている民間の団体または個人に加え、特別支援学校も対象となっています。購入費助成同様、3年以上の活動歴があり、今後も継続した活動が見込まれることが必要です。

北海道　公益財団法人ふきのとう文庫
熊本県　読書応援おはなしユニット・サニーにこ
東京都　筑波大学附属視覚特別支援学校
岐阜県　岐阜県立可茂特別支援学校
愛知県　愛知県立名古屋特別支援学校
愛知県　愛知県立にしお特別支援学校
京都府　京都府立南山城支援学校
島根県　島根県立松江養護学校
岡山県　岡山県立岡山瀬戸高等支援学校
岡山県　岡山県立岡山南支援学校
広島県　広島県立尾道特別支援学校
広島県　広島県立呉宮原特別支援学校
広島県　広島県立東瀬特別支援学校
広島県　広島県立広島北特別支援学校
広島県　広島県立広島中央特別支援学校
広島県　広島県立広島特別支援学校
鹿児島県　鹿児島県立鹿児島聾学校

◆子どもの本100冊助成先一覧(31件)

対象年齢別に「小学校低学年向け」「小学校中学年向け」「小学校高学年向け」「乳幼児向け」の4セット(各100冊)を用意。助成対象は「購入費助成」「病院・施設子ども読書活動費助成」と共通。活動歴は問いませんが、今後も継続した活動が見込まれることが必要です。

希望する対象年齢向けセットそのまま、または、対象年齢向けセット全400冊に2000年以降に出版された図書を中心に選ばれた150冊をあわせた550冊より100冊を選ぶことができます。

北海道　小樽・新光南あじさい町会あじさい文庫
北海道　さまに読み聞かせサークル「みるみる」
宮城県　おてんとさん文庫
宮城県　みどりが丘文庫
茨城県　にじいろひろば
福井県　お話玉手箱
愛知県　わいわいぶんこ
愛知県　すずらん文庫
京都府　みんなで文庫
大阪府　特定非営利活動法人IKUNO・多文化ふらっと
大阪府　ぴょん吉文庫
兵庫県　松の実文庫
兵庫県　すずめ文庫
鳥取県　別府ふれあい文庫
岡山県　白神千絵(個人)
岡山県　シービスケット
徳島県　ライブラリィ「絵本の読み聞かせ『にも』の会」
愛媛県　おやゆびひめの会
福岡県　まちいくサロンcote(あおぞら絵本文庫)
佐賀県　あわの家 太田薫
佐賀県　おはなし連絡会Morodomi
長崎県　くすのき文庫
熊本県　わくわく座
宮崎県　ラーニングパーク
アメリカ　わくわくの木Japanese Storytime with Malie-san
イギリス　北東イングランド補習授業校
オーストラリア　姉妹都市50周年交流記念 日本語図書コーナー
オランダ　Japanese Book Club Eindhoven
カナダ　バンクーバー日本語学校並びに日系人会館
ザンビア　(元ザンビア日本人学校)日本人図書館
スイス　ベルン日本語教室

◆子ども文庫功労賞

子どもの読書啓発活動に長年(20年以上)貢献されてきた個人を顕彰する賞です。1984年の第1回以来、昨年までに88名に贈られています。

本年の受賞者は、段千恵子さん(静岡県三島市)、正置友子さん(大阪府吹田市)の2名です。

段さんは、1993年に三島市で絵本を楽しむ会「てんとうむし」を立ち上げて実演活動を開始。翌年に自宅に「てんとうむし文庫」を開設しました。現在、「てんとうむし文庫」は三島市内3か所で展開されています。文庫活動のほか、作家や編集者を招いて、子どもの読書講座やワークショップを毎年開催。また、図書館や企業、学校などでの実演も行っています。

正置さんは、1973年に吹田市で家庭文庫「青山台文庫」を開設、その後、利用者が増加したため地域の集会所に移転して、2023年11月に文庫設立50周年を迎えました。地域の図書館の充実を働きかけ、勉強会「吹田子どもの本連絡会」の発足にも尽力。1994年にはイギリスへ留学してヴィクトリア時代の絵本研究で博士号を取得し、帰国後はブックスタート事業への協力や絵本学講座の開催など、はば広く活躍しています。

贈呈式は3月4日に、東京都港区の伊藤忠商事東京本社ビルで開催される予定です。

まちライブラリー北勝堂
(大阪府)

■第58回 新風賞

大人も子どもも楽しめる2作品が同時受賞！

『大ピンチずかん』の鈴木のりたけさん（右）と大垣会長

各地域を代表する書店のネットワークである書店新風会主催の「第58回 新風賞」贈賞式が、1月10日㈫、東京新宿区のハイアットリージェンシー東京で行われた。

今回、新風賞を受賞したのは、黒柳徹子さん『続 窓ぎわのトットちゃん』（講談社）と鈴木のりたけさん『大ピンチずかん』（小学館）の2作品。600名の書店員による選考での得票数が拮抗したため、ダブル受賞となった。

『続 窓ぎわのトットちゃん』は、昨年10月の刊行直後より大きな話題を集め、現在までで50万部に達している。前作『窓ぎわのトットちゃん』も第16回 新風賞を受賞していて、黒柳さんは有吉佐和子さん以来の複数回受賞者となった。受賞あいさつにたった講談社取締役の角田真敏さんは、「『窓ぎわのトットちゃん』が全世界でも2500万部発行。日本を代表する作品を世界中に届けていきたい」と述べた。

一方、『大ピンチずかん』は、2023年 年間ベストセラー総合第1位、児童書ベストセラー第1位を記録。続編『大ピンチずかん2』とあわせると100万部以上の大ベストセラーとなっている。小学館社長の相賀信宏さんは、出版ビジネスで「人々の心を潤し、笑顔を増やしていけるよう力をあわせていきたい」と述べた。

新風会会長の大垣守弘さんはあいさつで、能登半島地震で被災した書店への復旧支援活動を報告。被災状況や、地方書店が地域文化を支える役目をはたしてきたことに思いをはせ、今後も会として支援していきたいと述べた。

■新年名刺交換会

出版界の難局を、親和の精神で乗り越える

1月9日㈫、東京都千代田区の出版クラブビルで、出版関係者が一堂に会する「新年名刺交換会」（主催＝日本出版クラブ）が開催された。参加者は約350人。

あいさつにたった野間省伸・日本出版クラブ会長は、能登半島地震被災地へのお見舞いを述べたあと、流通環境への大きな影響が予想される「2024年問題」などさまざまな問題が山積しているが、「日本出版クラブ創立の理念である『出版界の総親和』の精神に立ち返り、この難局を乗り越えていこう」と呼びかけた。

当日配布された出版クラブ会報では、出版5団体の各代表が、「2024年問題」のほか、若い世代や海外市場へのアプローチ、「BOOK MEETS NEXT」の手応えと課題、街の書店の活性化の必要性など、課題や取り組みを紹介した。

開会にあたりそろって登壇した出版5団体の代表

会場には、「能登半島地震 義援金」募金箱が設置され、集まった義援金は全額、日本赤十字社へ寄託された。

■文部科学省「子ども読書の日」啓発ポスター

身近な図書館・書店で「本のたんけん」をしよう！

今年の「子ども読書の日」ポスター

文部科学省は、全国の公共図書館、小中高等学校、幼稚園などに配布する4月23日「子ども読書の日」啓発ポスターを制作しました。3月下旬には日本出版取次協会の協力で、読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」ポスターとあわせ、書店へも配布される予定です。

今年のポスターも、とよたかずひこさんの描きおろしイラストでキャッチフレーズは「本のたんけんにしゅっぱ〜つ!!」。ガイドに導かれたり、自分で選んだり探したりと、たくさんの本の「たんけん」にワクワクする子どもと動物たちが楽しいポスターです。

■第39回 梓会出版文化賞ほか

「子どもの権利条約」を柱とした出版活動を評価

専門書を中心とする出版社108社で構成する出版事業団体 一般社団法人 出版梓会が主催する「梓会出版文化賞」と「出版梓会 新聞社学芸文化賞」が決定し、1月18日㈭、東京都千代田区の如水会館で贈呈式・懇親会が開催された。

72社より250点の応募があり、一次選考を経て、2023年10月10日の選考会で「第39回 梓会出版文化賞」に選ばれたのは有限会社子どもの未来社。2000年に「子どもの権利条約」を掲げて創業した比較的若い出版社ながら、今回の自薦図書『戦争と平和 子どもと読みたい絵本ガイド』や『わたしは反対！ 社会をかえたアメリカ最高裁判事 ルース・ベイダー・ギンズバーグ』など、現代社会が直面する難問をどう考えればよいのかをテーマとした力強いラインナップが支持された。

同特別賞はBook&Design。複数の出版社に勤務してから独立した宮後優子さんが2018年に設立した、デザイン書を扱う〝ひとり出版社〟だ。谷川俊太郎の詩と沙羅の木版画をアートブックのようなデザインと印刷、造本で仕上げた『目に見えぬ詩集』などが評価された。

新聞社と通信社の文化面・読書面担当者が選ぶ「第20回 出版梓会 新聞社学芸文化賞」は、株式会社 彩流社が受賞。同社は1981年の創業で、神田神保町で社員10名と少数精鋭で旺盛な出版活動を続けている。同社の刊行物では、明治以降の牧羊の歴史に光をあてることにより、近代日本の歴史を浮き彫りにする、山本経典著『羊と日本人』などが高い評価を得た。

同特別賞は、株式会社 ポプラ社。1947年創業、近年話題書も多いが、2023年の刊行物でまず注目されたのは、ジェームズ・サーバー作、村上春樹訳の『世界で最後の花』だ。第二次世界大戦直前に書かれた「第十二次世界大戦」が起きた世界を描くこのロングセラー絵本を、各地で紛争が続くこのタイミングにあらためて世に出すという判断が支持された。

贈呈式で受賞各社の代表者が謝辞を述べ、懇親会では主催者代表の挨拶、選考委員による選考経過報告などが続いた。祝意のなかにも「出版不況」や「2024年問題」にふれるスピーカーも多く、出版界にとって身の引き締まる年頭を実感する夜となった。

今年の受賞社と江草貞治 出版梓会理事長、選考委員の記念写真

出版クラブビルでは受賞社の書籍を展示中（3月31日まで）

■能登半島地震 支援情報

各団体、地域の読書環境支援にむけて情報収集中

1月1日に発生した能登半島地震は、能登半島の読書環境にも大きな影響を及ぼしている。

日本書店商業組合連合会によると、「能登地区（特に輪島市、珠洲市、能登町、七尾市、穴水町）の書店に家屋、店舗全壊、半壊となったところが複数発生。1月17日現在に判明しているだけで、全壊6件、半壊1件、甚大被害2件を確認した。軽度の被害も含めると、ほぼ組合加盟全員が自宅や店舗に相当程度の被害を受けている。能登地区では亡くなった書店関係者もおり、避難所に身を寄せている方も多数」という。この状況を受け、石川県書店商業組合では義援金口座を開設している。

○義援金振込先
北國銀行 大桑橋支店 普通預金
0046491
口座名義：石川県書店商業組合
能登半島地震義援金

被災地書店の状況については、一般社団法人 日本出版取次協会が各取次会社からの情報を随時集約し、ホームページで公開している。1月24日現在、能登地区と新潟県新潟市の17書店が、営業再開未定となっている。

○日本取次協会ホームページ
http://www.torikyo.jp/

また、公益社団法人 日本図書館協会(日図協)では、被災地域の図書館に被災情報や相談したいことの提供を呼びかけると同時に、過去の震災を教訓として、これまで集めた情報や課題を基に、注意すべき点をまとめた「被災された図書館の皆様へ」をホームページで公開している。日図協では、被災地域の声をもとに支援を検討していきたいとしている。

○日図協ホームページ
https://www.jla.or.jp/

編集部では、今後も出版界・図書館界からの能登半島地震被災地への支援活動情報を掲載していく予定です。

優良読書グループの歩み (2)

2023年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

朗読ボランティア「ひばりの会」

代表者　津田　和夫

栃木県真岡市

〈推薦〉
栃木県読書推進運動協議会

朗読ボランティア「ひばりの会」は1982年に発足し、今年で42年を迎えます。当初は視覚障がい者の音訳ボランティアとして活動を開始し、同年8月から市の広報誌、地元紙、依頼図書の音訳を行ってきました。その間身につけた朗読技術を生かそうと、1983年7月から図書館での読み聞かせを皮切りに小学校・施設・病院へと領域を広げていきました。会員は現在26名で、社会福祉協議会が主催する「朗読奉仕員養成講習会」の修了生で構成されています。

音訳は5つの班にわかれ、広報誌・地元紙の音訳を分担しています。音訳班とは別に活動班を設け、広報誌と地元紙以外の種々の刊行物の音訳と読み聞かせを行っています。

真岡図書館の読み聞かせは、毎月第3土曜日の午後2時から30分間、ふたりずつ交代で実施しています。「おはなしの森」として市政こよみには紹介されています。はば広い年齢層を考慮し、つねに数冊の絵本を準備します。ときに紙芝居も交え、最後の折り紙遊びは恒例となっています。二宮図書館では毎月第1木曜日午前10時半から30分間、ふたりずつ交代で実施しています。おもに幼児が相手なので、大型の絵本やしかけ絵本、紙芝居、ときには人形なども使いながら行っています。

小学校での読み聞かせは年に3回、6・11・2月に実施しています。学校には前もって各学年ごとに書名、著者、朗読者を連絡することにしています。3回に1回は大型紙芝居を行っています。日赤小児病棟での読み聞かせは、毎月第2火曜日に4名で幼児から小学生相手に実施しています。その際、衛生面には十分気を遣っています。年齢差に応じた本を数冊持参していきます。興味の持てる、また、夢のある楽しい本を選び、大型絵本やしかけ絵本、幼児にはカラフルなわかりやすい本を用意します。児童発達支援センターには年2回訪問し、就学前の幼児と保護者相手に読み聞かせを実施しています。絵本のほかに指人形芝居、大型紙芝居などを取り入れています。

最後に、朗読技術向上のために月に2回定例会のあとに勉強会を行っています。また、毎年「3分間スピーチ」と称して勉強の成果を発表しあい、その後会食し、会員の相互理解と親睦を深めています。

サンタさんも一緒に児童発達支援センターを訪問

野露読書会

代表者　藤井　真人

石川県野々市市

〈推薦〉
石川県読書推進運動協議会

私は、石川県野々市市の読書会連絡協議会の会長を3年前に受け継ぎました。市にはみっつの読書グループがあり「野露読書会」は初代と2代目の会長を出していて私は4代目になります。3代目は「ふれあい読書会」から出ていました。このように発足は古く1964年にさかのぼり、当時は町内会女性部のサークルだったようです。

野露がここまで活動を継続できたのは市の文化協会と公民館に属していたことが大きく、外からの緩い強制力があったからだと思われます。毎年市の「椿まつり」と公民館の「マナビィフェスタ」で講演会を開き30回以上におよびます。市民参加を募るため地域の史跡や説話や方言をひも解く演題が多いですが、『方丈記』や『源氏物語』研究や金沢市民文学賞受賞者の文学に関する講演も行いました。

月1回の例会での課題本で、純文学や海外文学にも挑戦しているのは野露の特徴かもしれません。大江健三郎のノーベル文学賞受賞の年には『飼育』を読み、今年から『世界文学アンソロジー』をテキストに、クリスタ・ヴォルフやイタロ・カルヴィーノなども読んでいます。読連協の活動としては、合同読書会や文学散歩を毎年計画して実施は当番制でやっています。直近では、小林秀雄の『読書について』の合同読書会、徳田秋声記念館と周辺への文学散歩を行い、金沢の老舗料亭のランチなども会の交流には欠かせないものになっています。七尾市出身の絵師 長谷川等伯を描いた直木賞作家 安部龍太郎の『等伯』読書会では、七尾美術館での等伯展もあわせて見学

市読連協の文学散歩では徳田秋声記念館を訪問

しました。また加賀市には中谷宇吉郎の「雪の科学館」があり、文学散歩で見学する前に、一般向けの科学書『雪』から抜粋したテキストで読書会を行いました。これはいつもの小説の感想主体の読書会とは違う学びがありました。

現在会員は9名と高齢化で減少してはいますが、毎月の読書会は盛りあがり読書熱は高まるばかりで、次回の例会を皆楽しみにしています。野露の有志で「源氏物語を読む会」を作って『若菜下』まで続いているのがその証拠といえるでしょう。今後は石川県のほかの読書会との交流も視野に入れて活動をレベルアップしていきたいと考えています。

朗読クラブひかり

代表者　下西　恭子

和歌山県伊都郡九度山町

〈推薦〉
和歌山県読書推進運動協議会

1999年、社会福祉協議会主催で開催された「標準語を学ぼう」の講習会の受講者を中心に、現在の朗読クラブひかりの元となる『朗読教室』が誕生しました。

翌年、『朗読クラブ』と名称が変わり、朗読とは別に、町広報をテープに吹き込む「声のテープ」を作成するようになりました。

2004年には『朗読クラブひかり』というすばらしい名前をいただき、活動内容もテープ起こしから朗読を中心としたものに変わり、現在にいたっています。

毎月第1水曜日に公民館で活動しています。毎回、作品を読む前には発声練習をしています。北原白秋の『五十音』を、石川五右衛門や、坂東玉三郎になりきって声を出し、今ではとても上手になりました。読む本は、図書室で借りたり、孫の本であったり、講師先生の持ってきてくれる本から年齢にあったものを選んでいます。事務局は社会福祉協議会にあり、会長・会計を1名ずつ置いています。

日々の学びと練習がこれからも活動を充実させる

会の目的は標準語を勉強し、読み聞かせボランティアを行うことです。会員のスケジュールを調整したり体調も視野に入れながら、日程を決めています。毎年、森の童話館の「秋の読み聞かせと朗読会」と公民館の「九度山町文化祭」が、おもな発表の場となっています。また、九度山町戦没者追悼式で朗読を披露するなど、活動の場を広げています。

新型コロナ感染症が5類に移行した2023年度より、九度山保育所でも月1回の読み聞かせ会が再開しました。子どもたちが「今日はなに読んでくれるん?」と待っていてくれることや、「こんにちは」「ありがとうございました」と、声をそろえて言ってくれることに大きなパワーをもらっています。子どもたちとのちょっとしたおしゃべりも楽しみのひとつです。

九度山で暮らす私たちにとって、標準語はむずかしく、休んだりやめようと思ったこともありました。しかし、その楽しさに魅せられ、もう24年も続いています!

現在会員数4名、平均年齢70歳の私たちですが、藤田啓子先生のご指導の下、日々練習に励んでいます。老若男女問わず、本を読むことの楽しさを共有できる仲間を増やしていきたいと思っています。

読書ボランティア シュークリーム

代表者　川根志保子

香川県東かがわ市

〈推薦〉
香川県読書推進運動協議会

読み聞かせグループ「シュークリーム」は、2010年4月1日に設立しました。おもに東かがわ市内の小中学校で朝の読み聞かせ活動を行っています。当初は、幼稚園保護者で構成された人形劇グループで、幼稚園児への読み聞かせをしていました。その後、読書ボランティアグループ「シュークリーム」として、小学校での活動をスタートさせました。

読み聞かせ時は、絵本の内容に登場するくだものや野菜などをリアルに見せたり、人形劇で演じた作品の絵本を読むときは、人形も登場させるなど、工夫をして活動をしています。ほかの団体とは違い、人形劇経験者を中心に集まったグループなので、読み聞かせといいながら、人形劇で表現できたことは、私たちグループの大きな特色であったと感じています。とくに低学年の子どもたちは、たいへん喜んでいたことを、今も覚えています。

グループの活動人数が減ったり、コロナで活動の機会が減るなかで、現在は小中学校での読み聞かせのみとなりました。しかし、新たに加わったメンバーのなかに手話ができる人がいたので、読み聞かせにも取り入れることができないかと考えました。そこで、読み聞かせと同時通訳のように手話をするのではなく、読み聞かせをしたあとに、ぜひ覚えてもらいたいことばを手話で表現し、紹介しました。子どもたちも楽しく手話を覚えています。

また、外国の方の支援をしているメンバーがいるので、その紹介で県内に住む技能実習生と一緒に海外の紙芝居を読み聞かせたり、海外の文化を説明しています。子どもたちも外国の文化を身近にふれることができ、目を輝かせながら聞いている姿が印象的です。

さまざまな読み聞かせのスタイルを取り入れながら、今後も絵本を通じて子どもたちの興味・関心を引き出していける読み聞かせ活動を続けていきたいと思います。

■NPOブックスタート

図書館・保育現場で流れる親子の「絵本の時間」を紹介

NPOブックスタートは、「子ども・社会を考えるシリーズ」の新刊『絵本は親子のゆりかご』を刊行した。

『絵本は親子のゆりかご』は、2022年11月に開催された「NPOブックスタート 全国研修会」での伊藤明美さんの講演を収録したもの。公立図書館で長く司書として勤務し、地域のブックスタート事業立ち上げと推進に携わった伊藤さんが、自身の豊富な経験をもとに、赤ちゃんと保護者にとっての絵本・わらべうたの魅力と必要性、公共図書館における乳幼児サービスを紹介。また、伊藤さんは現在、保育園で司書として活躍中なので、保育の現場で絵本がどれだけ求められているかも、ふれられている。

同書はNPOブックスタートオンラインショップで購入可能（送料が必要）。また、電子書籍版も用意されている。書誌情報、購入方法など詳しくは、NPOブックスタートオンラインショップまで。

●NPOブックスタート オンラインショップ
https://bookstart.theshop.jp/

講演録『絵本は親子のゆりかご』

■第27回 図書館を使った調べる学習コンクール

11万を超える充実した「調べる」成果を審査・表彰

公益財団法人 図書館振興財団（東京都文京区）が主催する、第27回「図書館を使った調べる学習コンクール」は、2023年12月26日、東京都文京区にある図書館流通センター本社で最終審査会を行い、受賞作品を決定、2024年1月11日に財団ホームページ上で結果を発表した。

2023年9月11日～10月2日の募集期間に全国から11万8000作品を超える応募があり（第26回は約11万3000）、入賞33作品3団体、優良賞135作品、奨励賞266作品、佳作1319作品となった。

読書推進運動協議会が審査を担当した「調べる学習部門 小学生の部（低学年）」においては、文京区立柳町小学校からの「いもうとにえほんをつくりたい！ あかちゃんとえほんのひみつ」が文部科学大臣賞、墨田区立外手小学校からの「からだをまもる スーパーヒーロー!! 鼻のふしぎ」が優秀賞・日本児童教育振興財団賞、などが選出された。

また、総務大臣賞（地域コンクール主催者表彰）は、茅野市小中高校生調べ学習コンクールの「茅野市・茅野市教育委員会・茅野市校長会」が受賞した。

同コンクールの表彰式および交流会は、3月2日(土)に東京都荒川区のアートホテル日暮里 ラングウッドで開催される。

事務局報告（1月）

☆5日＝機関紙『読書推進運動』674号入稿
・5日＝「子ども読書の日」ポスター責了
☆9日＝機関紙『読書推進運動』674号責了
・9日＝出版クラブ新年名刺交換会出席
・11日＝2023年度 子どもの読書推進会議 第2回 総会案内 送信
・12日＝2023年度 子どもの読書推進会議 第2回 幹事会
☆15日＝機関紙『読書推進運動』674号出来
☆15日＝「第66回 こどもの読書週間」ポスター原画データ、ザ・キャビンカンパニーより受領、確認
☆18日＝「第66回 こどもの読書週間」ポスター原画完成、凸版印刷に入稿
・18日＝第39回 梓会出版文化賞 第20回 出版梓会新聞社学芸文化賞 贈呈式出席（如水会館）
・19日＝2024上野の森親子ブックフェスタ主催3団体運営委員会 打ちあわせに出席
・21日＝JBBY 第6回 子どもの本翻訳フォーラム（オンライン）出席
☆22日＝2023年度 第3回 理事会案内 郵送
☆23日＝**2023年度 第4回 常務理事会**
☆25日＝「第66回 こどもの読書週間」ポスター、レイアウト確認
☆25日＝富士フイルムビジネスイノベーションジャパンとPC入れ替えについて打ちあわせ
☆26日＝「第66回 こどもの読書週間」後援依頼を文部科学省ほか6団体に郵送

●編集部＆事務局のひ・と・こ・と

●「2023年度 全国読書グループ調査」の調査票をただいま整理・集計中です。今回の能登半島地震で大きな被害を受けた地域の図書館からも多くの読書グループのお名前をご報告いただいており、みなさんのご無事と安全をただただお祈りするばかりです。

●各道府県読進協からご推薦をいただく「全国優良読書グループ表彰」は、読み聞かせなどの実演グループが大半をしめますが、北陸地方からは歴史ある読書会の推薦が多いという特徴があります。今回の「読書グループ調査」でも、とくに被害の大きかった地域の図書館より、40～50年以上の活動歴を誇る読書会がいくつも報告されています。

●日本出版取次協会が、各書籍取次会社の情報を集約したところ、能登半島地震で被害を受けた書店は309店。書籍の落下や書架の転倒、津波で本がぬれた、店舗が半壊・全壊した、書店員の自宅が大きな被害を受けたなど、被害の形はさまざま。出版業界紙報道では、この被害で「廃業」を決めた書店が11店舗あるそうです。「能登地域の書店文化が消える危機」と報じた紙面もありました。

●脈々と本を読みあい、語りあってきた人々が暮らす地域に書店がなくなるかもしれない……。大きな被害を受けながらも「この土地で暮らしていきたい」と望む方々が再び読書会を開けるだけの安定を取り戻したときに、図書館・書店ともにそろった、自由に本を手に取れる環境であってほしいと願っています。（伸）